

その他

死行列車の始発駅

うらみ深き七番ホーム

大阪府 保川 進治郎

中学生が戦争で死に行く、本人の気持ち、親の気持ちを後世に伝えたい。

七番ホームとは、大阪駅の軍用列車専用ホームです。

私と同行した者も、六千人が東支那海の藻屑と消えてしまった。

私は十歳の時、病気で母を失った。父も私の特攻隊志願合格（親の印鑑をぬすんで志願した）を知って血をはいて急死してしまった。留守宅には叔父たちがいる。あ

のとき、面会にきてほしかったけれど、弟たちも面倒をみてもらっているので遠慮して、一人で死に行こうと思っていた。

友人たちは通信筒に家族への伝言を入れ、向いのホームの人達へ投げた。拾った人が、それを届けてくれることを願って。だが、私は通信筒を投げなかった。それが、この七番ホームだった。

——どこの飛行学校で教育を受けたのですか。

私は十五期生で速成特攻要員として養成された。学校は太刀洗で、教育中ピントはなかったが、なにごと五分間、今でも五分間でやれるのは太刀洗の訓練のおかげだ。大喧嘩をしたあとでもつき会える「蛋白さ」がパイロットには必要だ。これは事故につながるから。

訓練中、一番遅かった班だけは罰として、第一格納庫

から第八格納庫まで早がけ、その距離はかすんでしまうくらい長い。ピリから三人まではまたやり直し。それ以外の罰は吹きながしの下で三点(腕立て伏せ)を一時間、冬だったら手のひらが凍ってしまう。

北九州は玄海灘の風が小石と共に吹いてくる。学校では、なんでピンタをしないかというと、怪我をさせないためだ。何百人のなかから選んだ者を傷つけられない。

飛行機ははじめは初等練習機で、二葉の翼の大きさは同じ。次は中練(通称赤トンボ)で下の翼が短かい。高練は一葉になる。初練はまえに教官、うしろに生徒が乗る。だんだん練習するとまえに生徒、うしろが教官。そのつぎは単独飛行で「飛行手簿」をつけて乗る、風速とか天候……を。

離陸より着陸がむつかしいが、角度がむつかしい。着陸の時に事故を起こす、だから三点着陸をやかましく教えてくれる(腕立て伏せの型)。百人のうち単独飛行が出来るのは十人ぐらいという言い伝えもある。訓練期間中墜落、水田にもぐるもの、着陸でスピードを出しすぎ土まじりにぶつかって、エンジンを腹のうえにして死亡す

る者もある。

教育期間は、大東亜戦争までは一年、その後は半年。少年航空兵は第一期から二十期までである。

私は先程いったとおり十五期で、初期の二倍以上の人員が採用になった。十五期の戦没者は百一人、残り百九人、内沖繩戦参加四十人で生存者は少飛十五期太刀洗会を作っている。

昭和十九年の秋、大津に分遣されたが、太刀洗校の同期生は南方へ転属命令がでた。

1、第三航空軍シンガポール

2、第四航空軍マニラ(クラーク飛行場)。

私はフィリピン派遣で、誠一八四七〇部隊(二〇五戦隊)に転属の命令を受ける。そして単身大津駅を出発したが、長岡京あたりの柿がしんくに色づいていた。

—南方への輸送間のことを話してください。

小倉をでて、一船に五百人乗り、十四隻計七千人が博多、門司、佐世保から出港して、玄海灘で一緒になり船団を組んだ。

当時沖繩はもうやられ始めていた。

朝鮮の西海岸を陸地にそって北上した。直角にまがって西へ、青島沖から今度は中国の沿岸づたいに上海、温州と。小倉―上海間は五日かかった。

上海から南方へいくので米や水を積みこんだが、そのとき空襲で三隻やられ一千五百人が水没した。一隻は呉淞、一隻は黄浦江遡中、一隻は岸壁でだった。他の船は沖で待機していたので助かった。私は四隻目に乗っていた。呉淞でやられて泳いでいる者を三人引揚げた。三人共、温州へ着くまでに死んでしまった。上海―温州間は五日かかった。

台湾海峡は、月のない時、闇にまぎれて一度に出港したが、敵の機動部隊にみつかって四日目の晩、真つ暗闇の台湾海峡で傘型散開でパァッとでたが九隻やられ、私達の一隻は基隆につき、他の一隻は馬公へやっと着いた。

小倉を出発したのは七千人、そのうち六千人が死んだ。死んだ人たちは火だるまになって死んだ。それが忘れられない。そのことを後世の人に教えなければならぬのに、多くの人は嘘を教えてきた。

私達一隻だけ助かって、台湾海峡を渡れたのだが、我々の船はほとんど志願兵だった。少年飛行兵、特別操縦、特幹、民間のパイロットの徴用者が、基隆―高雄―フィリピンへ、悪魔の瀬戸、バシー海峡、地獄の瀬戸を乗り越えた。実戦につくまえに多くの苦勞をあげわったわけだ。

私は揚子江で沈没船の兵隊を救助中、ロープを投げて飛び込んで胸を打ったためか、右湿性胸膜炎にかかり、応急処置を受けて任地へ行ったが、四十度の高熱のため高雄にもどった。高雄は乾季で空襲があるので、大屯山の中腹の北投航空病院に入院療養した。そこは戦後蔣介石総統の別荘になったという。

北投病院を出て、特攻の基地・知覧で特攻宿舎の管理をした。天号航空作戦、沖縄作戦、レイテ作戦のため、南方、馬來、ジャワ、フィリピン各方面から知覧に集まった(台北は第八航空があったが出さなかった)。一人前、二十歳に至らぬ者が特攻に参加した。飛行機を棺桶にしてだ。

特攻のとき、鼻をつままれてもわからぬ真つ暗闇が

パァッと明るくなる。毎日、特攻宿舍の寢床がからになる。内地の知覧では親子と会わされたが、南方ではそれが出来なかった。私もあの時、泳いででも内地へ行って会いたかった。悲惨だった。

——私も知覧へ行って来たのですが、特攻のことは胸がつまる思いですね。

夕べの空に額いて

夜毎に祈る夜半の星

夕べの空に命あり

明日の空には露と消え

皆で祈る 国のため

君のため 国民のため

特攻隊員は死ぬまえの晩になると、死を覚悟できない人もいる。日本刀をふりまわして、一晩中あばれまわった者もあった。

特攻隊はその戦果をみるためについている飛行機がある（バンク）。突っこむのを確認する役目だ。三回帰ってきた者もいる。内地では特進している（死んだことにより特別に二階級進級）から「死ね」と命ぜられて、四回

目で死んだ者もいる。

辞世の句には

散りぎわを 父に見せたや 山桜

椰子の実を 父と母とに 土産とす

先輩達が南方特有の季語を考え出していった。

飛行中は、気温、気流は百メートルでかわる。操縦者には気流情報がきわめて大切で、気流を教える教官の方が操縦教官よりこわかった。大事故の全部が気流をあやまったためだ。

太刀洗陸軍飛行学校甘木生徒隊の第六中隊の少年飛行兵第十五期生は「あまぎ」という機関紙を発行している。私は戦友のこと、同期生のこと、十二隻の輸送船で沈没した六千人の人たちのこと等を今でもはっきりと記憶している。

「英霊気遣い」の私は、「太刀洗陸軍飛行学校校歌」第三〇曲全歌詞を三三回忌まで、毎晩淀川の土手で歌っていた。九時から十一時頃まで約二時間。

何故か？……特攻の仲間が死んでいった。また、無実の人ですりかえられて戦犯として刑死した人もいる。そ

れ等の死んだ人々に対するお経がわりに軍歌を歌った。

台湾要塞砲戦記

鹿児島県 砂田慶洲

昭和十六年九月二十六日下関重砲兵連隊に入隊、二日後下関を出港して長崎港着船内にて一泊、翌日長崎出帆、台湾基隆に向い航行、五日後に基隆より高雄に上陸、同訓練所で一泊。

翌日、高雄要塞重砲兵連隊に入隊、翌日から鳥松という島で訓練にはいる。砲種は十一年式高射砲で、二か月くらいで編成がえがあり第四中隊に配属された。中隊本部は林子辺というところであり、その先に港子甫という要塞砲の砲台があった。そこで約一年勤務したのち、連隊本部勤務となり、上等兵に進級し、六か月ぐらいこの中隊本部にいた後、十センチカノン砲係となりました。

その間、港子甫駐屯地守備の時、沿岸砲陣地の冲合を敵の潜水艦が潜望鏡を出して半潜水航行しているのを発

見、野砲二門で連続発射攻撃したが、命中の確認はできなかった。

昭和十九年九月ごろホウビトウという中隊本部のある上空を、グラマンとB 24の編隊が通過して中隊の北側を爆撃し、戦闘機は機銃掃射をくわえてきた。これに応戦して激戦をまじえたが飛行機に女性が搭乗して戦闘動作をしているのには異様の感があった。

また陣地の冲合を日本の機帆船団が十六隻日本に向け航行していたが、敵のグラマンの編隊がこれを発見、急降下反覆攻撃をくわえた。日本の船舶守備兵は機銃小銃等小火器を以て応戦していたがつぎつぎと撃沈されていった。

最後の一兵となるまで勇猛果敢に応戦してつぎつぎと戦死して行くさまを目前にみて、なんの応戦もできない、なんの甲斐性もない沿岸砲兵を許してくれと、涙を流しながら掌を合わせるしかなかった。如何に心ははやっても野砲ではどうしても弾がとどかないのです。

野砲の射程はせいぜい五千メートルか六千メートルであるが確実に命中する有効距離は三千メートルぐらいで